

明るい『訪問介護』ニュース

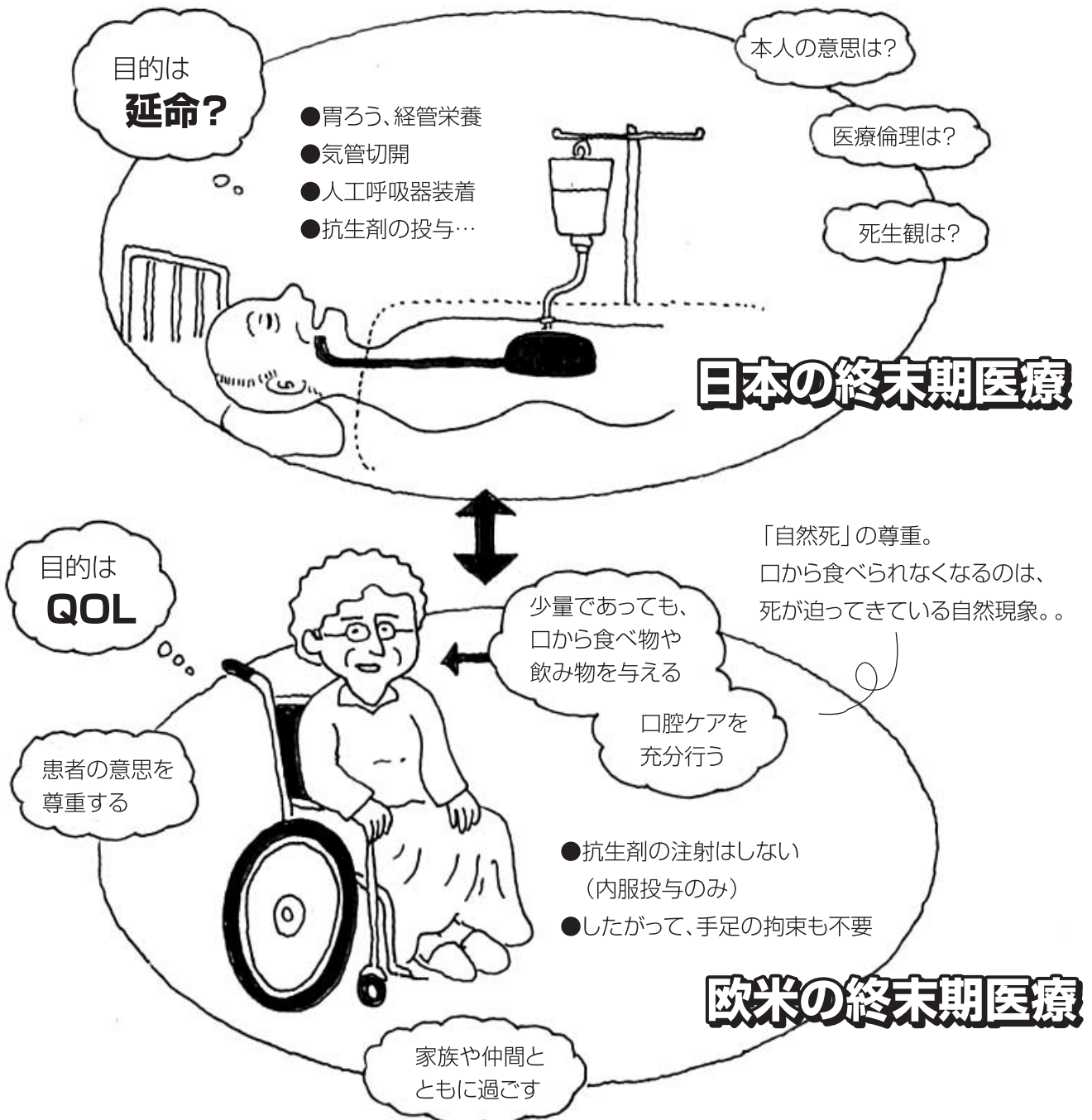
No.006 2014年7月号

発行：特定非営利活動法人つむぎ
〒632-0074 奈良県天理市東井戸堂町372-1

考えましょう。終末期医療問題。

一日でも長く生きていてほしい。そんな家族の思いとは裏腹に、終末期治療を受ける本人には、とても苦しんでいるかもしれません。介護と表裏一体となって避けては通ることのできない「死」の問題。もっとも心の重いテーマについて、海外の考え方と比較しながら、本人にとって「もっとも幸せな選択は？」という視点で考えてみましょう。

日本と欧米の「終末期医療」の考え方



「寝たきり」のいない欧米諸国

福祉大国であるデンマークやスウェーデンはもちろんのこと、イギリスにも、アメリカにも、欧米諸国には、いわゆる「寝たきり老人」は、ほとんどいないそうです。

一方、日本では「寝たきり老人」はたくさんいて、一言も話せない患者のお腹に穴を空け、そこから栄養剤を注入する「胃ろう」の姿をよく目にします。いわゆる「延命治療」といわれる行為です。なぜ、日本と欧米では、終末期医療の考え方が違うのでしょうか？

死生観と、考え方の違い

欧米諸国の考え方には、「人体の機能が衰えていくのは、ごく自然のこと」という大前提があります。

終末期となると、口からものを食べられなくなるのは、当たり前のこと。「食べないから死ぬ」のではなく、「死ぬから食べられない」というのが、彼らの考え方です。

体が受け付けられないもの、すなわち苦しむようなものを、強制的に投入し続ける…胃ろうや点滴で延命を図るのは、非倫理的であるばかりか、中には「老人虐待」という人さえいます。死生観の強い欧米ならではの考え方なのでしょうか？

海外では終末期医療については「延命治療」とは考えずに、最後のひとときまで「QOL(=生活の質)を向上させる」、「苦しみを緩和する」ということに重点を置いています。

本人の意思を尊重して

必ずしも延命治療がいけないと言いたいわけではないのです。

しかし、ものも言えず、体が固まって、胃ろうのために体を拘束させられている「本人」の尊厳とは、いったい何でしょうか？幸せとはいったい何でしょうか？もしあなたが、納得する死を選ぶとしたら、どちらを選ぶでしょうか？

「自分がしてほしいこと」は、「親もしてほしいこと」…と考えてみましょう。終末期医療に対する本人の希望を、事前に家族とよく話しあっておきたいものです。

介護の重要な役割

介護の本来の目的は、何でも「やってあげる」のではなく、「要介護者の残存能力をいかして、自立に導くこと」つまり今まで「ふつうにできていた体の動き、働きを取り戻すこと」です。言いかえると「寝たきり老人を出さない」ことが大きな目的でもあります。

訪問介護を離れ、医療施設に入り、手厚い保護を受けたとたん、「寝たきり」になってしまったという事例もよく発生します。

そんな理由からも優れた「介護技術」は、高齢者の尊厳を守り、かつ「寝たきり」を防止する、もっとも自然な方法でもあります。機器でも薬でもない、人を幸せにするのは、やっぱり「人」。

私たち訪問介護業界は、そんなミッションを背負い、日々介護技術の向上に努めたいものです。

明るい訪問介護プロジェクト <http://www.tumugi-homonkaigo.com/>

やること、
多すぎ…

詳しくは上記webサイトへ！

業務の「ムダ」、 効率の「ムダ」、 見直しませんか？

訪問介護の「現場」で生まれた、「現場」のための業務支援ASP

無駄ヘルサポート

- 訪問介護の業務にかかわるあらゆる帳票をサポート。
- シフトの作成が簡単、ヘルパーの稼働率アップに！
- 操作も簡単、インターネットにつなぐだけですぐにご利用可能。
- 必要なデータは、ボタン一つで印刷可能。